

偶然の発見追求型フィールドワークと 専門的知識を取り入れたフィールドワークの比較

—社会科部会歴史分科会発表会で報告した実践—

神奈川県立秦野曾屋高校 日戸勇希

はじめに

日本近現代史特講という授業で1回、発展世界史・発展日本史の合同授業で1回、フィールドワークを行った。それぞれ単元の組み立てを変えて実施した。本原稿ではその実践の報告と教育的効果がどこにあるのかを述べる。

1 研究について

私は教職6年目である。これまで主に地理や現代社会、政治経済、公共、世界史などを担当してきており、この6年間で日本史を持ったことは2回しかない。その2回のうち1回が今回紹介する「日本近現代史特講」である。日本近現代史特講は3名の受講者しかいない、他の教科と比べて自由度がかなり高い科目である。しかし、6年ぶりに開講されるということで、カリキュラムもほぼ残っていなかった。このような白紙の状態から出発した実践なのである。

一方、発展世界史は世界史選択のクラスである。3学年で開講され、受講者は24名である。発展世界史で行ったフィールドワークは、安全管理等の観点から教員が2人ついていかなければならないということで、発展日本史のクラスと合同で行うことで実施することができた。本研究では、フィールドワークを「調べつくした状態」からスタートさせるか、「調べない状態」でスタートするかを比較し、生徒の学びにどのような差異が生じるのかを検証したものである。

2 フィールドワークの2つのアプローチの定義

本研究で実践したフィールドワークは、佐々木秀之著『地域フィールドワーク実践入門—地域探究の道しるべ』（蕃山房出版）を参考にし、大きく2つのモデルに分類される。同氏の図表によれば、フィールドワークは「地域とのコミュニケーションの度合い」と「専門知識の豊かさ」という二軸で分類できる。

一つは「ブラタモリ型フィールドワーク（知識探索型）」である。地質や地形に関する専門性に長けている状態、あるいは事前の専門知識を豊富に持った状態で現地を歩き、その土地ならではの歴史的・地理的背景を紐解いていくアプローチである。この手法は、明確な課題や仮説を事前に設定し、それを現地で実証・検証していくことに重きを置くため、「専門知識の豊かさ」が特徴（軸において【多】）となる。事前の知識があるからこそ、現地での観察が「より深まる」効果がある。

もう一つは「鶴瓶の家族に乾杯型フィールドワーク（テーマ探索型・偶然の発見追求型）」

である。地域のことをよく知らない、事前の調べ学習をあえて十分に行わない状態でスタートするアプローチである。現地を歩きながら、地域資源や住民とのコミュニケーションを通して偶然の発見（セレンディピティ）を追求し、様々なことを見聞きしながら自らの興味関心と向き合い、テーマを探索していく手法である。こちらは「地域とのコミュニケーションの度合い」が高く、関心の育成に主眼が置かれ、生徒の視点が「より広がる」効果が期待できる。

本稿では、この対照的な2つのアプローチを異なる授業・対象地域で実践し、生徒の学びにどのような違いや深まりが見られたのかを報告する。

3 実践報告①：プラタモリ型フィールドワーク（津久井地域）

日本近現代史特講において、津久井地域（津久井湖城山公園および津久井城周辺）を対象に「プラタモリ型フィールドワーク」を実施した。本単元は全7時間で構成し、「戦乱の時代に敵が攻めてきた時、津久井城にはどのような機能があって後北条氏に重宝されていたのか」という課題を設定した。

最初の事前学習として、生徒は戦国期の関東の情勢を把握し、津久井城についてインターネットや文献を用いて調べ、Google スライドにまとめた。津久井城は城山という山を改造した山城であり、鎌倉時代に三浦党の築井氏が築城したと言われているが、本格的に城として使われ始めたのは戦国時代の後北条氏の時である。甲斐国境に近く、相模原や武蔵を支配する有力支城の一つであった。1569年の三増峠の戦いや、1590年の小田原征伐（徳川勢の本多忠勝や平岩親吉らに攻められ開城）の歴史的経緯、そしてその後に徳川氏の直轄領となり陣屋が置かれたという大まかな記録は残っている。しかし、「具体的にどのように攻め、どのように防衛したのか」といった実戦的な地形機能についてはネット上に十分な情報が載っていないことに生徒自身が気づいた。この「調べ尽くしたからこそ生じる疑問」が、「実地調査に行きたい」という強い動機付けとなった。

そして、5月12日に2時間分を使い、津久井湖城山公園にて実地調査を行った。生徒たちは今昔マップを用いて過去と現在の地形を比較し、実際に「男坂（車坂とも呼ばれ、やや急で短い）」や「女坂（なだらかで長い）」といった険しい山道を歩きながら、山城としての防衛機能を目と足で確認した。現地での検証により、津久井城には「堀切」と呼ばれる敵の侵攻を阻む構造が非常に多く存在し、城の麓にある「根小屋」からの攻撃を防ぎやすい構造になっていること、また八王子城と比較し、どちらも「太鼓曲輪」や「根小屋」があるという共通点を持ちつつ、津久井城には防御要素が多重に張り巡らされていることを生徒たちは自ら考察・発見した。

さらに、この知識探索型の調査は、城郭の防衛機能にとどまらず、地域の近現代史への探究へと大きく発展した。生徒たちは図書室の郷土資料（『忘れがたき激動の時代 相模原市の大正・昭和・平成』や『津久井町ダム史』など）を読み込み、夏休み期間中を利用して小原宿や勝瀬橋などに足を運び、自主的に調査を進めた。そして「湖底に沈んだ村の痕跡を追う～相模湖と津久井湖～」というスライドを作成し、社会科研究発表大会で発表するに至ったのである。

生徒は以下の3つの疑問を立てて検証した。

①「なぜ津久井湖と相模湖が作られる必要があったのか」：戦後（1900年代後半）の急激な開発による神奈川県全土（横浜、川崎、相模原、横須賀などの県東部15市9町）の水田

の水や飲料水不足、および電力不足を解消するためであった。特に相模原地区は火山灰が蓄積する乾燥壤土で高台に位置し、地下水位も低いこと水確保が困難であった事実を突き止めた。

②「実はまだダムに沈んだ村があったのではないか」：2001年に完成した宮ヶ瀬ダムの建設により、愛川町の宮ヶ瀬村（1889年成立、総人口約937人）が沈んでいることを発見した。

③「湖建設による村の人たちの不満はなかったのか」：勝瀬地区（約83軒、500人が居住）の「河水統制事業絶対反対用地不買同盟」や、旧津久井地区の「城山ダム建設反対期成同盟」など、激しい反対運動があった事実を掘り起こした。また、ダム建設の裏側で83人（日本人、中国人、朝鮮人）もの人々が殉職していることも明らかにした。

最終的に生徒は、「今の神奈川県全土の水に困らない生活は、ダム建設のために殉職した人々や、移転を強いられた村人の我慢と努力により成り立っている」という深い歴史的洞察を導き出した。

4 実践報告②：鶴瓶の家族に乾杯型フィールドワーク（曾屋神社）

一方、学期の最後に行った発展世界史と発展日本史の合同授業では、秦野市の曾屋神社周辺を対象に、「鶴瓶の家族に乾杯型（偶然の発見追求型）」のフィールドワークを実施した。こちらは事前学習をあえて深入りさせず、現地で見聞きしたものから自らの興味関心を探るアプローチを取った。生徒たちには、現地で気になったものの写真を撮影し、Google Classroomに「その写真」と「なぜその写真に問いを持ったのか」を限定公開コメントで提出させるという手法を用いた。

この偶然の発見から、生徒たちは非常に多様で独自性のある問いを次々と生み出した。例えば、今昔マップで100年前の地図と現在を比較し、現在沈んでいる場所に神社や学校の地図記号を見つけた生徒は「実際にここは人が住んでいたのではないか？」という問いを持った。

また、神社の境内に置かれた「男石」と「女石」に着目した生徒は、「なぜ男石と女石があるのか。なぜ女石だけが手水舎になっているのか」という疑問を抱いた。調査の結果、これらが「妹背石（いもせいし）」と呼ばれ、男女・雌雄一对の珍しく縁起のよい形状から命名されたものであることがわかった。男石はゴツゴツとどっしりしており、厄割桃を割る厄祓いの石として使われ、女石は丸みがありなめらかで、御神水を受ける水鉢（小松石）として使われていた。生徒はこれが単なる縁結びではなく、「土地の暮らしそのものを守る、村が続くための信仰」として、昔の人が生きるために整えていた場所であることを考察した。

さらに、曾屋神社に祀られている神について調べた生徒もいた。曾屋神社の創始の神は水を司る「水波能売命（ミズハノメノミコト）」であり、他に創造や武運、商売などの神が祀られている。これを同時代の他の神社（明治政府の管理下に置かれた国家神道の神社）と比較分析し、曾屋神社が国家への忠誠心を育む場というより、水の守護や地域コミュニティの統合（五穀豊穡・地域安全）を中心とした「在地神社」としての役割を果たし、日常生活に密着した願いを受け止める存在であったことを見出した。

加えて、境内に「狛犬」だけでなく「狛狐」がいることに疑問を持った生徒は、曾屋神社が貴重な湧水地であり、水神様を祀ったことで農業が発展したため、五穀豊穡の神であ

るお稲荷様（伏見稲荷の神使である狐）も後から祀られるようになったのではないかと、という鋭い推察を行った。

探究は神社の外のインフラにも及んだ。敷地内に残る昭和 35 年（1960 年）9 月竣工の「配水池」の看板を見つけた生徒は、「この配水池からどのように配水していたのか、地域によって配水方法に違いはあるのか」という横軸（空間軸）の問いを立てた。この配水池は内法の長さ約 15.3m、幅約 11.5m、深さ約 3.3m の地下式有蓋鉄筋コンクリート造で、防寒のため盛土をして芝が張られていた。調査の結果、他の地域がポンプ加圧方式で電力を多く使い停電時に不安定になるのに対し、秦野盆地は地形を利用した「自然流下方式」を採用し、高い位置にある配水池から重力のみで安定的に配水していた事実を発見した。現在でも秦野市は地下水 7 割、河川水 1 割、県水 2 割の比率で配水していることも突き止めた。

この水への探究はさらに縦軸（時間軸）へと広がり、記念公園ができるほどの水道の歴史の背景へと及んだ。明治時代の秦野では神社の湧き水や用水路を利用していたが、人口増加等で衛生状態が悪化し、感染症（コレラ）が問題となった。当時の横浜や東京が検疫・隔離・消毒といった対症療法を中心としていたのに対し、秦野では明治 23 年（1890 年）という全国で 3 番目となる極めて早い時期に、陶管を利用した総延長 5km の水道整備（曾屋水道）を行った。「水環境そのものを改善することで感染症を根本から防ごうとした」という地域固有の先進的な公衆衛生の歴史を明らかにしたのである。この曾屋水道は、近代水道施設として全国で初めて国登録記念物（遺跡関係）に登録されている。

5 教育的効果と今後の展望

本研究の実践を通じて、アプローチの異なる 2 つのフィールドワーク手法の教育的効果とその組み合わせの可能性が明確に見えてきた。「ブラタモリ型（知識探索型）」は、事前の調べ学習によって「ネットにはないリアルな情報」への渴望を生み出し、現地での観察の解像度を飛躍的に高める効果があった。事実、津久井城の防衛機能の検証から出発し、ダム建設の歴史的背景と水資源の問題へと、生徒自身の力で研究を大きく拡張していく姿が見られた。一つのテーマをより「深く」掘り下げるのに適している。

一方で、「鶴瓶の家族に乾杯型（テーマ探索型）」は、事前の枠組みや固定観念がないからこそ、生徒一人ひとりの純粋な「なぜ？」という素朴な疑問を出発点にできる強みがある。曾屋神社での実践のように、ただの石の形、古い配水池の看板、あるいは狢狐の存在といった些細な風景から、国家神道と在地信仰の違い、近代水道と公衆衛生の歴史といった高度なテーマへと、生徒自身の興味関心に従って自由に問いを展開させ、視点を「広く」持つことができた。

この結果から、今後のフィールドワークにおいては、これら 2 つのモデルを段階的に組み合わせることが効果的であると考察する。すなわち、最初は「鶴瓶の家族に乾杯型（偶然の発見追求型）」で生徒の関心を広く喚起し、自らの問いやテーマを見つけさせる。そして、その高まった関心をベースにして、次は事前学習と専門知識を組み込んだ「ブラタモリ型（知識探索型）」へと移行していく。このように段階を踏むことで、生徒の歴史的探究力はより深く、より自立的で多角的なものへと高まっていくのではないかと考えられる。

おわりに

カリキュラムが白紙に近い状態から手探りで始めた実践であったが、アプローチの異なる2つのフィールドワークを意図的に組み込むことで、生徒たちは単なる知識の暗記を超え、自ら地域の歴史を掘り起こし、現代の課題（水資源や公衆衛生など）と結びつける深い学びを実現することができた。今後も、地域の歴史的資源を積極的に教材化し、「歩く・見る・問う」活動を通して、生徒の歴史的思考力と探究力を育成する実践を継続していきたい。本実践が、地域と連携した歴史教育のさらなる発展の一助となれば幸いである。

使用したスライドの一部である。

1. 二軸図

図表1「地域とのコミュニケーションの度合い」と「専門知識の豊かさ」を指標とした二軸図

2. ブラタモリ型フィールドワーク

3. 鶴瓶の家族に乾杯型フィールドワーク

4. フィールドワークの理想

5. ブラタモリ型フィールドワークで使用したワークシート

日本近現代史特講	フィールドワークシート	氏名
訪問先		
①わたしの興味関心	②背景(事前調査で知った事柄やデータ/社会的課題とされていること/レクチャーから得た気づき、等)	
③わたしのフィールドワークテーマ(訪問先について、着目したい、より深く調べたい視点)		
④目的		
⑤フィールドワークで得たい情報	⑥目で見て確認したいこと(どんなことに着目しながら歩くか)	⑦目で聞いて確認したいこと(情報を得るために、誰にどんな質問をするのか)

《参考文献》

佐々木秀之著『地域フィールドワーク実践入門―地域探究の道しるべ』（蕃山房出版）